

儀間 哲

嘉数 嘉昌

金城 孝

赤嶺 浩

金城 常雄

Five Grand Master in OKINAWA 沖縄空手五大拳雄

発祥の地で神髄を受け継ぐ 五人のグランドマスターに迫る！

中国の「唐手」から日本の「空手」、そして世界の「KARATE」へ。
国を超え、人種を超えてワールドワイドな広がりを見せる、空手という身体文化。
その故郷である沖縄は、空手の源流を伝える達人たちが住まう聖地でもある。
彼らに教えを受けるべく、今日も世界各国から多くの空手家が沖縄を訪れている。
本記事では、沖縄における主要四流派——小林流・上地流・剛柔流・琉球古武道、
それぞれの神髄を今に受け継ぐ五人のグランドマスターを徹底紹介！

写真協力◎Ageshio Japan (株) 文◎加藤聡史

達人たちの住まう聖地

今や世界の津々浦々に広がりを見せ、6000万人以上の修行者がいると言われる「空手」。日本は空手の母国だが、さらにその故郷であるのが沖縄である。

特段、武道・武術に興味がない方でも、今年8月に沖縄で行われるバスケワールドカップ、プロ野球チームが毎年キャンプを張り、マリンスポーツも一際盛んな、この地の人々の身体文化への深い傾倒はよくご存じのはず。まして武道・武術を嗜む者ならば、琉球王朝の450年に及ぶ長い歴史と中国や東南アジア諸国との深い付き合い、江戸期の薩摩藩支配、そして近代に至つての米軍の占領と現在も存在する基地との交流などは知つていよう。

激動の歴史と、周辺情勢に好むと好まざるとに関わらず巻き込まれた多種多様な文化の交差点とも言うべき地で生まれた極めて優れた身体文化「沖縄空手」に、憧れと興味を持たない者などいようはずがない。本稿では、その沖縄に住まう数多の達人たちの中でも、選りすぐりのグラドマスターたちをご紹介します。

小林流が誇る達人中の達人

小林流・嘉数嘉昌範士10段は御年

79歳。空手修行歴は60年に及び、既に40年以上の空手指導歴がある。現在も初心者から練達の士まで多くの門弟を育てながら、ご自身の稽古も日々欠かすことがない。一般的には高齢と言われる年齢ではあるが、空手そのものの稽古のみならず、ウエイトトレーニングも日々の稽古に導入し、その肉体の鍛錬に余念がない。空手を志した切っ掛けは、幼い頃に見た『イガグリくん』など柔道漫画に登場する空手家だった。彼らは悪役ではあつたものの、拳足で岩も木も破砕する、その圧倒的な威力の描写が幼き日の嘉数少年を虜にしたのだ。以来、巻藁での鍛錬は小学生時代から開始。長じて高校時代から沖縄拳法、警察官時代は剛柔流、さらに小林流へと学びを広げていった。44歳の時に自らの道場、拳士会総本部を立ち上げ。現在に至るまで大勢の門弟たちに父のように慕われている。多くの門弟の方々が口にするのは「優しい語り口での懇切丁寧な指導」。海外から訪れて言葉が分からず、心細い思いをしている門弟にも気遣いを欠かさないといい。

一方で、若年から武勇伝には事欠かず、フルコンなど他流の試合にも積極的に参加してきた嘉数師範の基本動作や型の力強さは尋常ではない。それを見る者は、長く弛むことなく

嘉数嘉昌

沖縄小林流拳士会総本部会長



嘉数 嘉昌 Kakazu Yoshimasa

小林流範士10段。沖縄小林流拳士会総本部 会長。那覇市空手・古武道連合会会長。沖縄拳法の中村茂先生から黒帯を允許され、19歳の頃に順道館の宮里栄一先生から剛柔流を、その後、小林流究道館の具志堅弘先生や比嘉祐直先生から小林流を学ぶ。その空手は歴史に名を残す多くの名師から学び取った経験に裏打ちされており、琉球古武道にも精通している。

沖縄の空手家たちから達人中の達人と仰ぎ見られる嘉数師範。御年79歳となる現在も、道場では常に先頭を切つて稽古と指導に邁進している。

み続けるのだ。

畏怖される上地流の「怪物」

続いてはやはり小林流同様、沖縄空手を代表する流派、上地流から金城孝範士10段をご紹介します。金城師範は、上地流を創始した上地完文

宗家の長子にして2代目・上地完英宗家から、直接指導を受けたグラウンドマスターである。今回ご紹介する五人のグラウンドマスターの中でも84歳と最高齢ながら、上地流独特の非常にハードな稽古を日々欠かすことはないそうだ。

上地流の他にも琉球古武道三代流派の一つ、又吉古武道の基礎を又吉真豊宗家と共に築き上げた方でもある。地元沖縄ではやはり超実戦派として知られ、その鍛え上げられた肉体も相まって、沖縄の名だたる空手

家たちからも「怪物」と畏怖される存在である。一方で、その技術は非常に理論的かつ緻密なものとして知られている。初心者から上級者まで、しっかりと上達し得るよう丁寧に編まれた稽古体系も特徴的である。

金城師範自身は「守・破・離」の考え方を重んじており、徹底的に口ジカルな技術を追求し、2000年には自らの流派、孝武流・孝武会を立ち上げた。

金城師範の自然体から繰り出される技の数々は、スピードと切れに富

金城孝

沖縄孝武流孝武会会長

金城孝 Kinjo Takashi

上地流範士10段。沖縄孝武流孝武会会長。沖縄空手・古武道連盟副会長。上地流2代目・上地完英宗家に師事し、又吉真豊宗家から又吉古武道の指導を受ける。その後、松林流開祖・長嶺将真宗家、上地完英宗家、糸数盛喜先生にも学ぶ。宗家直系の伝統技術を継承する数少ない人物。

み合理的な鍛錬の蓄積による身体の練り込みが感じられる。上地流を基礎として又吉古武道、そして自然な体捌きに基づいた技法や鍛錬法を学ぶのは、全て空手修行者にとって間違いなく有益なことに違いない。

剛柔流順道館の名師範

そして、本土の空手家たちにとっても馴染み深い剛柔流から金城常雄範士9段。沖縄空手の中で最もメジャーな流派と言える剛柔流にあつてなお最大規模を誇る組織、順道館の総本部師範である。後に紹介する儀間哲範士9段と共に、順道館における双壁をなす師範と言えよう。

金城師範は、その空手人生をハワイから始められている。順道館のハワイ道場にて、徳村政民師範から教えを受けたのが空手との出会いであった。その後は帰国して、剛柔流流祖・宮城長順公認後継者である宮里栄一師範の薫陶を受けた。

海外生活が長かったため、英語に堪能で性格的に包容力に富んだ金城師範は、日本人・外国人の門弟の区別なく難解な技術を分かりやすく説明する術に長けている。合理的でグローバルな視点と沖縄人としてのローカルな視点を併せ持った稀有な存在であり、空手の深奥を求め世界各地からやってくる修行者にとつて、

教えを乞うのに打って付けの師範と言えるだろう。

金城師範もやはり「守・破・離」の精神をお持ちで、使える技を徹底的に追及する空手が特徴である。真摯なお人柄と重厚且つ切れ味鋭い技の数々。ディテールに拘った型の分解、解説で海外にも多くの支持者を持つ金城師範。古式の鍛錬具の使い方から巻藁の突き方、三戦といった剛柔流の基礎・基本と言える部分まで、今一度しっかりと再確認したい修行者には是非とも教えを受けることをお勧めしたい指導者である。

古伝を受け継ぐ順道館範士

数多くの剛柔流の名士たちを輩出した、順道館のもう一方の双壁を担うのが儀間哲師範だ。儀間師範は宮里栄一師範に1971年から師事し、師に付いて台湾や中国での剛柔流のルーツとなる中国武術も修行した宮里師範の跡継ぎ的存在だ。入門時から宮里師範の直弟子として、その古伝の技術を継承し、師の教えをしっかりと守り伝えてきた生粋の順道館範士である。

儀間師範もやはり海外での指導経験が豊富で、その指導力には定評がある。剛柔流で最も難解な型と言われる転掌においても氣息と拳の一致さらには「チンクチ」「ムチミ」「ガ

上地流の代表的な型「三戦」を指導する金城孝師範。沖縄では超実戦派として知られ、その鍛え上げられた肉体も相まって、「怪物」と畏怖される存在である。

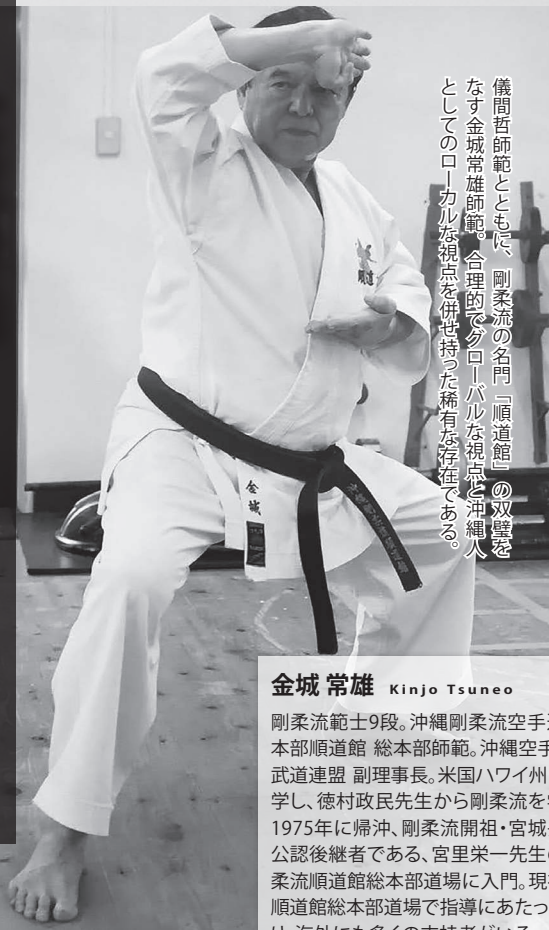


流祖・宮城長順から宮里栄一師範へと伝承されてきた、剛柔流の古伝を今に受け継ぐ儀間哲師範。競技空手とは全く異なる、武道としての剛柔流の技術に精通した達人だ。

儀間 哲 Gima Tetsu

剛柔流範士9段。沖縄剛柔流空手道総本部順道館 総本部師範。沖縄空手・古武道連盟 副理事長。宮里栄一先生より順道館総本部道場で剛柔流を学び、その後、師に連れられ台湾や中国(福州)で剛柔流のルーツである中国拳法を学んだ。宮里栄一先生の技術を継承する生粋の順道館範士であり、現在、順道館総師範代として活動している。

金城常雄 沖繩剛柔流空手道総本部順道館総本部師範



儀間哲師範とともに、剛柔流の名門「順道館」の双璧をなす金城常雄師範。合理的で効率的な視点と沖繩人としてのローカルな視点を併せ持った稀有な存在である。

金城常雄 Kinjo Tsuneo

剛柔流範士9段。沖縄剛柔流空手道総本部順道館 総本部師範。沖縄空手・古武道連盟 副理事長。米国/ハワイ州に留学し、徳村政民先生から剛柔流を学ぶ。1975年に帰沖、剛柔流開祖・宮城長順公認後継者である、宮里栄一先生の剛柔流順道館総本部道場に入門。現在は順道館総本部道場で指導にあたっており、海外にも多くの支持者がいる。

マク」といった重要な各身法をこと細やかに指導されている。

空手はオリンピックの競技種目にもなり、スポーツ化においてはある種、極点に到達したとも言える。しかし、スポーツとは異なる生涯武道、一生をそこに費やす道としての空手も脈々と沖繩の地に文化として根付いている。競技空手とは全くベクトルの異なる伝統武術としての空手を学ぶにあたって、剛柔流の真伝を受け継ぎ、さらにその源流を遡って修行を重ねた儀間師範ほど適任な指導者はいまい。

琉球古武道のレジェンド

誰もが認める達人中の達人五人の最後を飾るのは、琉球古武道の赤嶺浩範士9段。現状、琉球古武道の第一人者と目される師範である。御尊父は赤嶺榮亮師範。琉球古武道連盟の会長を長年務められた方で、琉球古武道三代流派の一角を担う平信賢師範の直弟子であった。そのため、現在沖繩で活動している琉球古武道師範たちは、その多くが赤嶺榮亮師範の流れを汲んでいるというのだから、まさに琉球古武道のレジェンド家系と言えるだろう。

赤嶺浩師範が受け継ぐ琉球古武道の技術体系は膨大で、いずれかの師範が教則本などを出す際は、赤嶺師

範の協力なしには纏めきることができないほどだそう。主宰する琉球古武道信武館は創立50年を超え、世界各国50ヶ国にまたがる大組織となっており、琉球古武道界を名実ともに代表する大道場である。

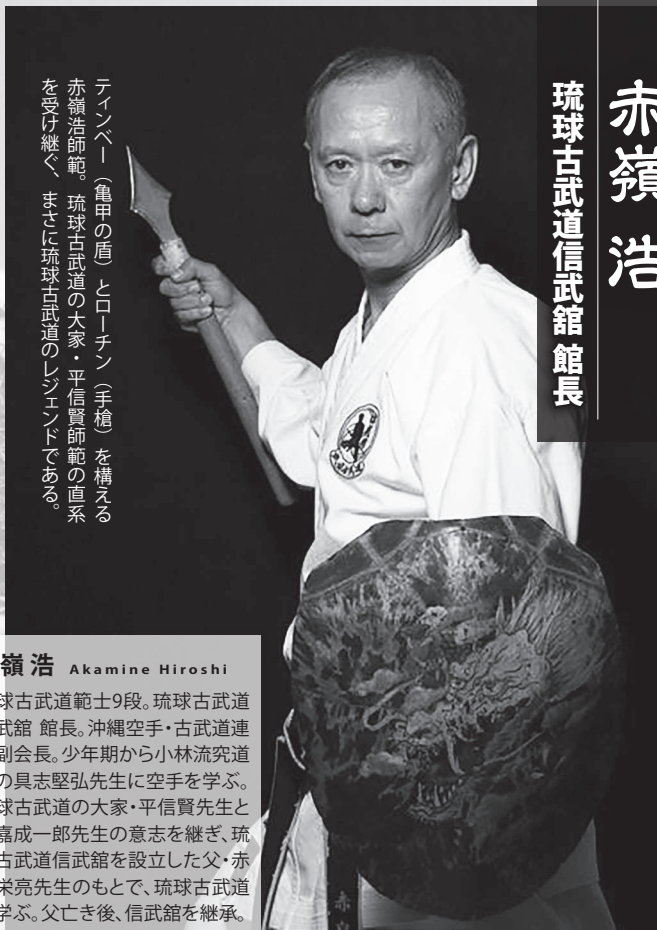
世界各地でその指導を熱望される赤嶺師範の指導は、棒やサイといった琉球古武道の主だった武器を中心にヌンチャク、手甲、トンファー、エイカー、鎌など、各武器を使用する上でのポイントを的確に押さえた非常に分かりやすいものだ。

空手と古武道は両輪の関係にあり、基本を重視した赤嶺師範の指導は、空手の上達をも促す効果があるという。「空手の稽古に専心に打ち込んでいても、ある時期壁に突き当たることが、古武道の身体の使い方を学ぶことで、それを乗り越えることができ」とは双方を学ぶ空手家の弁であり、本土や海外の空手家たちにも必ずや上達の糧になるはずだ。

発祥の地で空手のルーツを辿る

沖繩を代表するグランドマスターたちの紹介は以上となるが、やはり沖繩を訪れたからには行っておきたい名所旧跡がいくつもあるはずだ。

そこで、やはり筆頭に挙げるのは「沖繩空手会館」だろう。特別道場「守禮之館」や充実した資料室を備



赤嶺 浩

琉球古武道信武館館長

ティンバー（亀甲の盾）とローチン（手槍）を構える赤嶺浩師範。琉球古武道の大家・平信賢師範の直系を受け継ぐ、まさに琉球古武道のレジエントである。

赤嶺 浩 Akamine Hiroshi

琉球古武道範士9段。琉球古武道信武館 館長。沖縄空手・古武道連盟副会長。少年期から小林流究道館の具志堅弘先生に空手を学ぶ。琉球古武道の大家・平信賢先生と比嘉成一郎先生の意志を継ぎ、琉球古武道信武館を設立した父・赤嶺栄亮先生のもとで、琉球古武道を学ぶ。父亡き後、信武館を継承。

え、沖縄空手を保存、継承、発展させるために建設された、まさに空手発祥の地・沖縄を世界に発信し、空手を学ぶ拠点となる施設だ。建設されてまだ数年ではあるが、既に現地の空手家たちの間でもシンボリックな場所として親しまれ、活動拠点にもなっているという。

また沖縄空手会館の設立以前から、長らく現地の空手家たちの活動を支えてきた「沖縄県立武道館」の存在も忘れてはならないだろう。規模の大きい大会を開催する場合など、まだまだこちらでも活躍の機会は多い。続いては、現地那覇市民の憩いの

場でもある「松山公園」。こちらには那覇手中興の祖である東恩納寛量ひがのん かんりょう並びに、その弟子である宮城長順の顕彰碑が建立されている。これらの碑を訪れるのも空手家としては外せないところだ。

いずれにせよ、自らの修行する「道」のルーツを辿り、実際にその地を訪れて体験し、現地の物を食すことで、より一層理解や思い入れも深まり、モチベーションも高まるであらうことは疑いない。本土の空手修行者には是非、機会を捉えて沖縄を訪れ、彼の地に伝わる空手の源流を体験してほしいものである。 ■

沖縄空手史跡紀行

沖縄空手を世界に発信する拠点「沖縄空手会館」(①)。沖縄空手会館の敷地内にある特別道場「守禮之館」(②)。「松山公園」には東恩納寛量と宮城長順の顕彰碑(③)と久米村600年記念碑(④)がある。元祖・沖縄空手の殿堂「沖縄県立武道館」(⑤)。

